

2018年1月14日 礼拝メッセージ

聖書：第一列王記5章7～18節

説教：きょう、主はほむべきかな

はじめに

ダビデはソロモンを次の王とすると指名して間もなく、天に召されました。ソロモンはまだ若くて経験がありません。こんな場合、普通であれば有力な後ろ盾や、相談する人がそばにいる者なのですが、彼の場合はだれもいなかった。相当悩んだようです。そんなあるとき夢の中で主の語りかけを聞きました。

「あなたに何を与えようか。言ってみなさい。」そこでソロモンは夢の中でこう言うのです。「善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください。」この願いは御心にかなったので、そのとおりにしようと主はお答えになります。夢から覚めたソロモンは非常に驚き、王として人を治めるのに、人の知恵ではなく常に主の知恵を求めなければならない。そのことを深く自覚します。

その主の知恵とはどのようなものであったのか。ソロモンは、父が願っていた神殿建設計画を具体化していくのですが、そのプロジェクトの進め方の中で次第に明らかになっていきます。そこでまず最も大切なことは神殿建設の動機です。世の王であれば、自分の栄光を国の内外に知らしめるための大いに利用するでしょう。しかしソロモンはそうしない。主の御心でなければ神殿は建たないと知っています。神殿建設は主の御心かどうかを確かめようとします。どうやって確かめるか。ソロモンはこう考えた。神殿を建てようとするとき二つの問題がある。一つは材料が足りない。二つ目は職人が足りない。も

し御心ならばこの二つの問題が解決されるだろう。そのように祈り続けていたある日、ツロの王であるヒラムが王の就任祝いを届けてきた。この機会を利用して、ソロモンはヒラムに神殿建設のために援助してもらえないか相談を持ちかけます。ヒラムはどう応じたか。それが今日の箇所となります。

1 ヒラムの驚き

1) 主はほむべきかな

ツロの王ヒラムは、ダビデがエルサレムに自宅を建てようとしたときに杉材を送って助けてくれたことがあり、それ以来の友人でした。ダビデが亡くなくてもその友情は忘れません。ソロモンがダビデの跡を継いだと聞き、外交特使を派遣してお祝いのことばを送りました。ソロモンはお祝いのお返しと言うことで、今度は自分のほうからヒラムに特使を派遣しお礼を述べた後に、今言ったように神殿建設のために援助をいただきたいのだがと相談します。

これを聞いたヒラムの反応が7節にあります。「ヒラムはソロモンの申し出を聞いて、非常に喜んで言った。『きょう、主はほむべきかな。このおびたしい民を治める智慧ある子をダビデに授けられたとは。』」

ヒラムは、ソロモンが智慧ある者であることを認め、「きょう、主はほむべきかな」とまで言って喜びました。「これは、すばらしい知恵だ」とヒラムがうなったわけですから、普通でないことをソロモンは語っているようです。いったい何がヒラムをうならせたの

か。これが今日のポイントになります。

2) 木材の値段

そのことを知るために、ソロモンとヒラムのやりとりを見ておきましょう。ヒラムはこう言っています。8 節。「あなたの申し送られたことを聞きました。私は、杉の木材ともみの木材なら、何なりとあなたのお望みのおりにいたしましょう。」そう言ってから、木材をどのルートで運ぶのか。どこで木材の受け渡しをするのか。細かなやりとりを確認してから、最後に一つだけ条件を出しています。9 節後半です。「それから、あなたは、私の一族に食物を与え、私の願いをかなえてください。」

それでソロモンは木材の代価として11 節にあるような食糧をヒラムに毎年送ることになります。ある一説によれば、木材の代価としてはかなり少ない量の食糧であったと言われます。またいっぽう、それでもイスラエルにはかなりの経済的な負担になったであろうとも言われています。

2 ソロモンの知恵

1) 謙遜：私ではなく、主が建ててくださる

このようにして貿易交渉は成立しました。スムーズに話し合いが進んだ背景には、ソロモンが最初に語ったことばがあります。5 節です。「今、私は、私の神、主の名のために宮を建てようと思っています。主は私の父ダビデに『わたしが、あなたの代わりに、あなたの王座に着かせるあなたの子、彼がわたしの名のために宮を建てる』と言われたとおりです。」

かつてヒットラー・ドイツは、1936 年に

開かれたベルリンオリンピックを政治宣伝のとして最大限に利用したと言われます。同じようにソロモンも王の権力をイスラエル国内はもちろん、諸外国に見せつけるために、神殿建設事業を最大限に利用することもできたはずですが。ところがソロモンはそうしない。「主は宮のことについて父ダビデにこう語っておりました。それで宮を建てるのは私の役割なのかもしれないと思い、それで材料の提供をお願いするのです。」そんな言い方なのです。「おれが、おれが」というのではありません。実に謙遜です。

2) 誠実：熟練した者がいない

それだけではない。もうひとつある。6 節です。「どうか、私のために、レバノンから杉の木を切り出すように命じてください。私のしもべたちも、あなたのしもべたちといっしょに働きます。私はあなたのしもべたちに、あなたが言われるとおりの賃金を払います。ご存じのように、私たちの中にはシドン人のように木を切ることに熟練した者がいないのです。」

国と国が外交交渉をするとき、いろいろなカードを手もとに置いて、交渉を有利に進めていくのが鉄則です。そのカードの中には、こちらが持っている軍事力であったり、国としての豊かさであったりします。そういう面から見れば、ソロモンが治めているイスラエルから見れば、ヒラムの国は領土も小さく、民の数も少ない。国の力で比べれば、ソロモンが有利です。ですから、ソロモンはもっと高飛車に交渉を切り出すことができたはずですが。木材を出さなかったなら、そちらに軍隊を差し向ける。力で脅すこともやろうと思えばできた。

ところが、ソロモンの交渉の仕方はどうでしょう。神殿建設はどうしてもやらなければならない国家的使命である、とは言いません。主がお語りになったことばがあつて、それで自分が建てることになりそう。もしかして建てないかも知れない。そんなニュアンスさえ含まれている。こんな言い方したら、普通、「やる気あるんですか？」と失笑を買うところです。それだけではない。「私たちのところに熟練した者がいない」とも言っています。こんなことはよほど相手を信頼しない限り、一般の外交交渉では言わないでしょう。ソロモンは、非常に無防備です。自分の弱みをヒラムに包み隠さず明らかにしていきます。

ヒラムが驚いたのはこのことです。国の力から言ったらソロモンが上でヒラムは格下なのです。それなのに、国力を振りかざして力でねじ伏せるようなことはしない。ソロモンは実に謙遜で誠実です。それを見てとったヒラムは叫びます。「きょう、主の名はほむべきかな。このおびたしい民を治める智恵のある子をダビデに授けられたとは。」力を振りかざして相手をひざまずかせていくのではなく、謙遜に誠実に、弱さもそのまま相手に明らかにする。主がソロモンに与えた知恵とは、このことです。ソロモンを信頼し、ソロモンの望むだけ与えようとしています。

3 神殿とイエス・キリスト

1) 神殿の礎

さて、およそ三千年前に行われた外交交渉の話と私たちの信仰はどう結びつくのでしょうか。そのことを考えておかなければ、ソロモンの信仰はりっぱだったということで終わりです。

糸口は17節にあります。「王は、切り石を神殿の礎に据えるために、大きな石、高価な石を切り出すように命じた。」6章以降では、神殿の構造や材質についてながながと説明が続いていきます。それを讀むと、神殿がいかにすばらしいものであったかは何となくわかりますが、正直に言えば少々うんざりしてしまいます。「それがどうしたのですか」と言いたくなる。でも聖書は私たちの救いのために書かれているはずなので、退屈に見える説明でも、実は何か意味があるはず。全部はわかりません。でもいくつかはわかる。その一つがこの、「礎の石」です。

前回も述べましたが、ソロモンが建てた神殿についてイエスは「この建物は完全に崩される日が来ます」と述べ、その時以来、神殿とは目に見える建物のことではなく、イエス・キリストのからだを指すようになります。ということは、ソロモンが建てようとしている神殿は、イエス・キリストのからだと無関係ではありません。密接につながっています。だれでも家を建てる時、基礎が大切であることを知っています。イエスはあるところで、家を砂の上に建てるのか、それとも岩の上に建てるのか、嵐になったときその違いがはっきりと現れると語っています。

まして神殿のことです。どんな基礎の上に神殿を建てるのか。それは大切なことです。ソロモンは、「大きな石、高価な石」でなければならぬと考えました。それは何を意味するのか。

2) 大きな石、高価な石

神さまの宮にふさわしい建物の礎ですから、やっぱり高価な物でなければならぬ。そうかもしれません。でも神とはどんな方か。

高価な材質の物で建てたから喜ぶ方なのか。ソロモンは、建物としての宮を建てようとしています。けれども、目に見えるものだけがすべてだとは思っていない。目に見えないものも見ています。いまは目には見えないけれども、やがて来られる救い主のからだを、まるで見えるかのように造らなければならないと、知っています。

それでは救い主のからだはどんな礎の上に建てられるべきなのか。そのことについて、ソロモンは自分では語らない。その代わりヒラムが語ります。ソロモンの信仰の中に、キリストのからだの礎が見えています。なんでしょう。ソロモンが語ったところです。神殿を建てるのは自分ではない。主が建ててください。御心ならば神殿建設の役割を担うのは自分かもしれない。そのような謙遜を示しました。ソロモンは、ヒラムを小さな国の王さまに過ぎないと軽蔑しません。交渉を有利に進めるために、力を誇ったりするのではなく、本当はなにもないのに、あるかのように見せかけたりもしない。ただ正直に自分の足りなさ、弱さを申し述べて、ヒラムに助けを求めていった。そのような誠実さ。これがキリストのからだの礎である。それが神殿の礎となる。

その礎を据えるために、ソロモンは、大きな石、高価な石を切り出すように命じました。私たちはどうでしょうか。そんな石など据えていない。とても理想にほど遠いとお感じでしょうか。キリストが私たちに示してください。十字架を仰ぎ見たいと思います。神が、罪人である私たちのために謙遜と誠実を示してくださいました。私たちの手では据えることのできない礎を、この方がすでに据えておられることを覚えたいと願います。